

『俊寛僧都嶋物語』論序説

著者	石川 秀巳
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	3
ページ	148-138
発行年	1995-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/34436

『俊寛僧都嶋物語』論序説

一

村上天皇の第七皇子、二品中務卿具平親王四代の後胤、京極の源大納言雅俊卿の孫にして、木寺の法印寛雅の子、法勝寺の執行権大僧都俊寛は、配所鬼界島においてその生涯を終えた。

俊寛の死去に至る経緯を、『平家物語』は次のように伝える。――平清盛のために近衛大将任官の望みを挫かれた新大納言藤原成親は、俊寛僧都・平判官康頼・西光法師・多田蔵人行綱らを語らって、平家討滅を画策した。が、行綱の返り忠によって陰謀は露顕し、西光は糾問のうえ斬首、備前国に流罪となった首謀者成親もその地で殺害される。俊寛・康頼および成親の嫡子丹波少将成経の三人は、薩摩瀧の孤島鬼界島に遠流となった。翌治承二年（一一七八）、中宮御産の祈りのために行なわれた赦免にも漏れ、ただひとり残り残された俊寛は、主を尋ねて島に渡った童有王から都に残してきた妻と幼な子の死を知らされると、食を断ち、有王に見とられつつ息絶えた。

石 川 秀 巳

さのみながらへて、おのれに憂き目を見せんも、わが身ながらつれなかるべしとて、自ら食事を止め、偏に弥陀の名号を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。有王渡つて二十三日と申すに、僧都庵の中に、遂に終り給ひぬ。歳三十七とぞ聞えし。有王空しき姿に取りつき奉り、天に仰ぎ地に俯し、心のゆく程泣きあきて（中略）、臥所を改めず、庵を切り懸け、松の枯枝、蘆の枯葉をひしと取り懸けて、藻塩の煙となし奉り、茶毘事終へぬれば、白骨を拾ひ頸に懸け、又商人船の便にて、九国の地にぞ著きにける。（流布

本 卷第三「有王島下」①）

茶毘に付されたことまでをはっきりと記すように、『平家物語』において俊寛の死は疑いのような不明な事実となっている。

その俊寛が実は生きて都に戻っていたという虚構を設定し、その上に、

鬼界嶋に只一人。とり残されたる俊寛なれば。鬼界島の鬼をかたど。一人残りし一をとつて。鬼一法眼と名を更め。……

(第十五套⁽²⁾)

と付会を加えつつ、『義経記』などに載る伝説的人物、京一条堀川の陰陽師鬼一法眼へと変身させたのが、曲亭馬琴の読本『俊寛僧都嶋物語』(前編四卷四冊、文化五年(一八〇八)正月刊。後編四卷四冊、同年十月刊。)である。

二

鬼界島での無惨な死を語った『平家物語』の記述(史実)に反する俊寛生存の虚構を、しかし馬琴は自由に仕組んだわけではなかった。卷之一「俊寛僧都嶋物語引用書目姓氏古跡出證」には登場人物などについてその出典が明示され、卷之八「俊寛考」には法勝寺の事跡・俊寛の家譜など十九箇条におよぶ考証が付載される。歴史考証の基盤の上に物語を構築しようとする馬琴の稗史の方法を見逃すわけにはいかない。諸書にあたって史実の確定を行ない、そのうえで、虚構の根拠(可能性)を史実・伝承の間隙に求めるのである。

「俊寛考」中に、「俊寛^{しゅんくわん}於^{おいて}配所^{はいしよ}不死^{ふし}といふ説^{せつ}」の項目がある。諸史料間での没年の「銚盾^{しゆけん}」を挙げ、次いで、俊寛は頼朝の時代に都に帰り奈良に隠れ住んだという『歴史徴』(松崎祐之、寛政十二年(一八〇〇)刊)に載る説、あるいは、俊寛は康頼らとともに赦免の船に乗って肥前国まで戻り鹿瀬庄にとどまってそこで死んだという『謡曲画誌』(中村三近子、享保十七年(一七三二)刊)の説を引いて、

その生存の可能性を次のように記している。

凡^{およそ}その死^しの定^{さだ}かならざるもの。みな其^{その}年^{とし}其^{その}地^ちに死^しなずといふ。為^な朝^{あさ}。義^{よし}経^{つね}。義^{よし}秀^{ひで}。俊^{しゅん}寛^{くわん}等^らこれなり。よりて口^{こう}碑^ひに伝^{つた}る所^{ところ}稍^や久^{ひさ}して。人^{ひと}終^{つひ}に疑^{うたが}ふ事^{こと}なし。しかれども。これを無^む稽^{けい}の談^{だん}として誣^{しひ}がたき事^{こと}あり。所謂^{いはゆる}俊^{しゅん}寛^{くわん}は。奈^{なら}良^らにて没^{ぼつ}すると記^{しる}し。或^{ある}は肥^ひ前^{ぜん}の鹿^か瀬^せにて卒^{しゆつ}すといふもの。おのくその縁^{えん}故^こなきにあら^ず。平^{へい}家^け物語^{ものがたり}。盛^{せい}衰^{すい}記^き等^らに。俊^{しゅん}寛^{くわん}の女^{むすめ}児^こ。奈^{なら}良^らなる姨^{おば}御^ご前^{ぜん}の家^{いへ}にありけるよし見えたり。しかれば奈^{なら}良^らは由^ゆ縁^{かり}の地^ちなり。また同^{どう}書^{しよ}どもに。肥^ひ前^{ぜん}国^{くに}鹿^か瀬^せの庄^{せう}は。一名^{いふ}味^{あじ}木^きの庄^{せう}といふ。たんのせうくなり。つね盛^{せい}衰^{すい}記^きの九^くに云^いふ。丹^{たん}波^は少^{せう}将^{しょう}成^{なり}経^{つね}の舅^{うしうと}。門^{かど}脇^{わき}平^{へい}幸^{きやう}相^{さう}教^{きやう}盛^{せい}の領^{りやう}地^ちなりけるよし見えたり。かゝればこの処^{ところ}も。又^{また}俊^{しゅん}寛^{くわん}が隠^{かく}家^けには。便^{べん}宜^ぎの地^ちならん。これらの事^{こと}をもて思^{おも}ふに。件^{くだん}の両^{りやう}説^{せつ}も誣^{しひ}べからず。

俊寛は孤島において没したため、有王の他にそれを確認する者がなかった。没年の記録には異同があり、しかも命終の地の異説にもそれなりの根拠が認められる。——『嶋物語』の虚構の根幹は、こうした必ずしも「誣」ることのできぬ伝承に依拠して設定されたのである。もちろん、「俊寛考」がそれ以前の物語部分をさして「狂言綺語を旨とせし。前冊の物語」と総括してみせるように、俊寛生存の物語などがあくまでも虚誕にとどまると認識されていたことは疑いない。が、稗史を書く馬琴の営為とは、史料に見出された互いに矛盾する史実・異伝を受け入れ、それらが同時に成立するような世界を贗造することであつた。

馬琴は「俊寛嶋物語後編」執筆の計画を持っていた。『嶋物語』

構想の基盤にあった右のような発想はこの続編の構想をも根底で支えたと考えられる。刊末に「義経洛没落以後の事に係る」「徳寿丸観山に登りて法眼俊玄と号する迄のものかたり」と予告されたその内容については改めて検討することとして、ここでは、俊寛息男の事跡が物語化しうると判断されるのが次のような事情によることをおさえておきたい。すなわち、「俊寛考」中の「俊寛家譜」の項では、

「大系図」（『尊卑分脈』）に拠って、

第七俊玄 法眼 俊寛 嫡子 観山

と記したうえで、

按ずるに。平家物語長門本に。俊寛が息男は。治承二年七月十日に早世（中略）を記す。又盛衰記には。俊寛の息男は。治承三年五月。痲瘡にて身まかり。（中略）とありて。いづれも俊玄法眼が事を記さず。その説すべて。大系図に引ところと鈍盾す。

と、史書の間での「鈍盾」を指摘する。史実考証を語るこの部分では「すべて物語には。憑空結構の筆もまじるべければ。大系図をもて。是とすべきにや」と判断が下されるのだが、物語作者としての馬琴にはこうした「鈍盾」こそが虚構化の契機となる。『平家物語』諸本間に没年の「鈍盾」があるのは、俊寛「息男」の死をめぐってその事実の確認を妨げる何かの理由が隠されている故であろう。また、法眼になったと記される人物が一方で「早世」という異伝を持つことに

は、秘められた事情が介在していたと考えてよいはずだ。——馬琴の想像はこう増幅していくのではなかったか。自身の創造した徳寿丸という人物を史実に確認しうる俊玄法眼に付会することで、新しい物語世界を切り開いていく構想が可能になるわけである。

『嶋物語』は、史実にそっくり従って構想されるのでもなければ、史実とはまったく関わらない無制限の自由の上に構想されるのでもない。

史実を基にしつつ、史料間の矛盾に立脚し、伝承の経路を通じて虚構を立ちあがらせる〈史実の虚構化〉の構想とともに、『嶋物語』には、当代において俊寛・鬼一法眼それぞれの伝承・異説として伝わるものの起源がこの虚構の物語にあったかのように付会する〈虚構の史実化〉の趣向も認められる。

物語末尾の第十五套、鬼一法眼の洞窟に一同が再会し、物語をつき動かしてきたさまざまな要因に決着が与えられ、登場人物たちもそれぞれに身のありようを定めていくことになる。たとえば、義経と俊寛とを結びつけ、あるいは俊寛と鬼一法眼の正体をあばく契機となるなど、本作でもっとも重要な小道具である鶴の前の片袖・短冊は鞍馬寺に埋葬されるのだが、その袖塚を『義経記大全』頭書の「鬼一法眼が女児。年十八にてむなしくなりぬ。屍を鞍馬寺に葬る」という記述に関係づけ、また、『山州名迹志』に鞍馬の近村にあると記される「鬼一法眼が塚」も、「鬼」が女児の塚ならん歟」と袖塚の訛伝だと強弁する。つまり、鬼一法眼に関わる史跡の起源が『嶋物語』の俊寛にあ

るかのように語っているわけである。また、九州に下った俊寛親子・蟻王（『嶋物語』で有王にあたる人物）らは平家滅亡後「思ひの外に世間よのなみだ広くなりて。則すなはち加世かぜの庄せうに。一字の堂舎だうしやを建立こんりうし。これをも法勝寺ほうしやうじと号ごう」したと『謡曲画誌』の異説に付会させ、あるいは、頼朝と不和になった義経の都落ちを聞いた俊寛は兄弟の和睦を請うために都に上ったが、すでに義経は衣川に滅んでしまったので九州へは戻らず、『南都なるとに到いたて。法華寺ほつけじの傍かたへに世を避さけ。其処そこにて大往生だいわうしやうを遂とげた」と、『歴史徴』の記事に一致させようとする。互いに排除しあうはずの俊寛終焉地に関わる二説を、俊寛の継起する行動の訛伝だったとして同時に成立させ、それによって伝承の起源を虚構しようとするのである。

『嶋物語』とは虚実の往還構造の上に構築された〈史伝物〉読本なのである。

三

史実・伝承の間隙に虚構の端緒を見出し、その上に成立した虚構を史実・伝承の起源として回帰させる虚実の往還構造を示すのは、『嶋物語』だけではない。『椿説弓張月』（文化三〇八年（一八〇六）一）（一）、『頼豪阿闍梨怪風伝』（文化五年（一八〇八））と連続する模索期の〈史伝物〉三作に共通して認められる特徴であることをかつて指摘した^③。今、史実との関わりについてその類似点を挙げてみよう。

たとえば保元の乱・治承の大乱などを時代背景に取り、史上実在の

人物を主人公に選んで、『保元物語』『平家物語』の史実に拠りつつ構想した、歴史小説であること。

『弓張月』で鎮西八郎為朝を琉球争乱の中に推しやって朦朧との闘争を生じさせる契機となったのは『保元物語』に見出される為朝勘当の史実であり、それが保元の乱前史の中で生じた為朝・信西の対立から起こったことだとして虚構化を図る。『怪風伝』は、同時期に平家討伐の兵を挙げながら源頼朝の圧力に屈して嫡子を人質に差し出さなければならなかった木曾義仲の対抗意識を『平家物語』から読み取り、死して鼠となってまでも燃やし続けた頼豪阿闍梨の延暦寺に対する競争意識を同種のもものと見て、そこに頼豪怨霊憑依の経路を設定するのである。後に詳述するように、『嶋物語』も『平家物語』の語る俊寛らの謀議を松の前をめぐる俊寛・清盛の対立に関わらせて意味づけ、その上に虚構の物語を展開させている。同時期に執筆刊行された〈巷談物〉では、史実を利用することはあっても背景をなすにすぎず、史上的人物・事件に焦点をおいて語ろうという意図は認められない^④。〈史伝物〉において、史実は物語の背景を提供するばかりではない。物語を動かしていく主要因を歴史の中に見出し、その上に虚構を組み立てようとするのである。

また、この〈史伝物〉三作は、史実の間隙に虚構を立ちあがらせるのに、史実においては生を全うすることなく志半ばに滅んだはずの人物を取り上げ、なお生き延びさせて史実の語らぬ事件の中に登場させるといふ、〈生きていた死者〉の構想をもっている。

物語』の特質が現われている。

『弓張月』では鬼夜叉による身替り死が物語表面で語られた。しかも、それは、全六十四回中での第二十二回、物語の三分の一を経過したばかりの段階である。当初の構想が拡大されているから回数による位置の測定はそのままでは無意味だと言うなら、前後二編、日本編と琉球編の対置という初期構想の中で、琉球編へと展開していく中間部・接合部にあたると考えてもよい。いずれにせよ、神話的発想に成る琉球争乱こそが物語の中心をなす^③のであり、そうした虚構世界へと飛翔していく転回点として身替りによる大島脱出が位置づけられる。

あるいは『怪鼠伝』では、大太郎＝真の義高の見顔わしとともに〈入れ換え子〉のトリックの説明が、小太郎・棧橋夫婦への説明の形をとりつつ、読者に対して示されるのであり、それは全十八套中での第五套においてであった。偽義高の死によって新たに登場してきた真の義高が、頼豪の霊から妖鼠の術を授けられて〈鼠〉性を帯び、猫鼠対立の基本構図の上に構築された虚構世界へと投入される。そして、猫鼠対立の帰趨こそが主たる興味となる^④。〈生きていた死者〉は、それ自体が物語の興味を支えるのではなく、中心となる虚構世界への結節点をなすのである。

史実に基づき変容を加えた部分とそこから離れて虚構を展開させる部分との対置あるいは重層によって物語を創出するところに『弓張月』『怪鼠伝』に共通する構想を認めるとき、しかし『嶋物語』がそのようには構想されていなかったことに気づく。

生存を虚構世界への入口とする『弓張月』『怪鼠伝』に対して、『嶋物語』では入水した俊寛の生存は、全十五套中での第十五套、すなわち団円部まで秘められたままなのであり、俊寛の死の真相が明らかにした時点で物語は終熄を迎える。トリックは団円に資するのみであり、虚構の原理に従った物語世界を切り開いていく契機となることはない。他の二作とは〈生きていた死者〉の果たす機能がまったく異なると言うべきであろう。

読者に対してまで俊寛の死を秘匿し続けるとき、俊寛に即しての物語展開は不可能となるだろう。為朝を琉球という新たな時空に投入し、そこで神話的な王権争奪の戦いに活躍させるような物語、あるいは、父義仲の無念を受け継ぐ義高を頼豪怨霊の支配下におき、象徴的猫鼠対立の虚構世界の中で行動させるような物語を、俊寛は担うことができない。

このように考えてくるなら、類同的と見える模索期の〈史伝物〉三作の中で、『嶋物語』が異質な構想を持っていたことが知られるのである。その虚構世界は、それならば、どのように語られるのか。

五

祇園精舎の鐘の聲。諸行无常の響あり。沙羅双樹の花の色。盛者必衰の理を顕す。奢れるものも久しからず春の夜の夢の如し。猛き心も終には滅びつ。風の前の塵におなじ。(第一套)

『嶋物語』の書き出しである。『平家物語』起筆部のあからさまな利用^①は、史実に沿って開始しつつ、次第に虚構世界へと移行させる馬琴〈史伝物〉構想の一面をよく表すだろう。『平家物語』と交叉させるところに物語世界を成立させようとしているのである。

では、『平家物語』を変形し、『嶋物語』へと移行させる端緒となるものは何か。『平家物語』は右の箇所の後、異朝・本朝に著名な反逆者を列挙し、中でも「心も詞も及ばれ」ぬ平清盛の悪行を語ろうとするのだが、『嶋物語』は、「悪行者揃え」を省き、

和漢^{やまとくわん}この傳多^{たつた}かる中に。清盛入道^{きよもりとうどう}が一期^{いちご}の栄花^{えいけ}。俊寛僧^{しゆんくわんそう}都が孤嶋^{つたへ}冤苦^{えんく}。伝^{つたへ}て後に聞^きくだにも。心詞^{こころことば}に及^{およ}ばれね。(第一套)

と、流布本で言えば巻第三に飛んで、清盛と俊寛とを対比的に登場させ、両者の関係へと焦点を合わせるところに物語の起点を据える。すなわち、源平合戦前史とも言べき鹿谷事件を中心として、その後の俊寛一家の命運をめぐって叙述していくことになるのである。それならば、鹿谷事件は『平家物語』を基にどのように構想され、二人の関係はどのようなものとして設定されたのか。

保元の乱・平治の乱を通して武家勢力が政治を動かす主動力であることが明確となり、さらに朝家の護衛を担ってきた源平二氏の拮抗関係は平家の勝利に終わる。源氏追い落としに成功した清盛の累進に伴って百官の半分をも一門が占める平氏の異例の栄華に対して、そのとき、旧勢力とも言うべき旧来の貴族層の反感が底流することになるわけだ

ある。が、それを『平家物語』は新大納言成親の策謀に収斂させた。清盛が天下を握り絶頂を極める中で、それを揺り動かそうとするのが近衛大将の望みを二度にわたって清盛のために挫かれた成親であったという『嶋物語』の展開は、『平家物語』と変わることがない。

法勝寺の執行俊寛が成親の謀叛に与したのは何故であったか。「一念^{ねんげん}稀救^{ききう}の志^{こころざし}を転^{ひるがへ}し。三塗^{さんと}悪趣^{あくしゆ}の魔隊^{またい}に入りぬる事。以^{もつ}あるかな。」(第一套)として挙げられるのは、まず、祖父に似て「心ざまいと猛^{たけ}き」性向の故に深い思案もなく謀叛に加わったという理由である。そのかぎりでは『平家物語』流布本が語るのと同じなのだが、平氏専制下の世の中を「傍^{かたはら}痛^{いた}く思^{おも}ひ」、「朝廷^{みかど}の御大事^{おんだいじ}」の際にはいかにもして「国恩^{こくおん}に報^{むく}」いようと考えていたのだと、原抛^{はら}の猛々^{まうまう}しさを剛毅さに置き換えている点に留意しておきたい。それは、俊寛の罪惡とそこからの救抜という意図によるだろう^②し、また、構想の基幹に関わるより重大な理由が挙げられる。『源平盛衰記』では、祖父ゆずりの性向という理由のほかに、異説として、その背後にあった事情を次のように説きもする。

成親^{ナカノキヤウ}卿^{モト}ノ許^{マツ}ニ。松^{マツ}ノ前^{マヘ}。鶴^{ツル}ノ前^{マヘ}トテ。花ヤカナル上童^{ウヘワラハ}二人アリ。松前^{マツノマヘ}ハ容顔^{ヨウガン}ハ勝^{マツ}タレ共。心^{ココロ}ノ色^{イロ}スクナシ鶴前^{ツルノマヘ}ハミメ貌^{スガタ}ハ少後^{オウゴ}レタレ共。心^{ココロ}ノ色^{イロ}今^{イマ}一際^{ヒツカ}深^{フカ}リケリ。謀叛^{ムハン}ノ事^{コト}ニ依^{ヨツチ}彼^カ力^{リキ}心^{ココロ}ヲトリ語^{カタ}ハンタメニ。中御門^{ナカノミカド}高倉^{タカクラ}宿所^{シュクショ}へ執行僧^{シユキヤウソウ}都^ツヲ請^{モツ}メ酒^{サケ}ヲ出^{イデ}シ彼上童^{カノワラハ}二人ヲ以^{モつ}様々^{サマサマ}ニシヒタリケリ係^カシ程^{ハカリ}ニ僧都^{ソウツツネ}常^{ジョウ}ニ通^{ツネ}テ。始^{ハシ}ハ松前^{マツノマヘ}ニ志^{コハロサシ}ヲ顯^{アラハ}シケルガ。後^{ノチ}ニハ鶴前^{ツルノマヘ}ニ思^{オモヒ}移^{ワツシ}テ。女子^{コノシ}一人

儲タリケルトカヤ。大納言此事打語と解ケ給ケレバ。無_二左右_一領_{リヤウジヤウ}掌_{ナカリ}モ無ケレトモ。鶴_{ツル}前_{マヘ}ニ心ヲ移_{ウツ}シテ隙_{ヒマ}ナク通ケレハ。終_{ツイ}ニハカク同意_{ドウイ}シケリ (巻第三「成親謀叛事」⁽⁹⁾)

『嶋物語』はこれに依拠している。成親にはすでに謀叛の意思があり、その仲間として俊寛をかたらうために上童をあえたところ、松の前に思いを寄せた俊寛が、「成親卿の情ある志を感激し。この卿の爲ならば。命も何か惜かるべき」と、その恩義に報いるために陰謀にも「一議にも及ず。第一番に荷担」した(第一套)と説明されるわけである。同時に、大高洋司も指摘する⁽¹⁰⁾ように、その間の経緯を逆転させ、謀叛の決意以前に松の前をめぐる俊寛・清盛の妻争いを敷設する。典拠の一つと考えられる近松門左衛門『平家女護島』(享保四年(一七一九)初演)にも俊寛の妻あづまやに対して清盛が色情を抱くことがあるから、それが発想を促したのかもしれない。『盛衰記』が成親の上童の一人と語る鶴の前を俊寛と松の前の娘と改めたのは、俊寛の愛を単なる色好みから救いあげ、松の前との夫婦の結びつきを純化するためであっただろう。

俊寛とともに思いを寄せていた清盛の要求にも関わらず、成親は松の前を養女として俊寛に娶せる。そのことを恨みとして、子息の重盛・宗盛を左右の大將に据え、その後も「清盛入道思ふ旨やありけん」と事情のあったことを暗示しつつ清盛による成親冷遇を語り、その結果成親は後白河院の近臣たちを語らうわけである。清盛が平治の乱の際信頼方についた成親の罪科を「さまぐにこしらへて」許したのも、

成親に恩をきせ松の前を懇望するためだったと、時間を遡ってこの原理による歴史改変(解釈)が施される。その清盛の希望を拒み上童松の前を俊寛に与えたその恨みにより、「成親俊寛等がうへに。越度あれかし」と「窃にその隙を窺」っていた清盛は、成親の望みを知りながら「成親卿に物をおもはせて。已前の恨を復ん」ために徳大寺実定を大將に推したと、「徳大寺の沙汰」も虚構によって変換される。成親の陰謀の原因と『平家物語』では特筆される「大將の事」を変換して、望みを清盛に挫かれることの原因を松の前に設定し、そこに成親の陰謀が醸成されたとするのである。

また、陰謀発覚後の備前国流罪にとどめず、配所での殺害さえ命じたとされる清盛の成親に対する重い処断(「大納言死去」)について、『平家物語』からは、平治の乱で信頼方に付いたのを重盛のとりなしで死を免れたのにも関わらずまたも平氏を滅ぼそうと企んだことへの報復であったように読みとれる(「小教訓」)のだが、それも、これ当初。清盛の需に応ぜず。松の前を俊寛に妻したる。怨を報んとて。かくまで苛く挙止るなるべし。(第五套)

と、松の前に起因するように虚構している。鬼界島の流人の中で俊寛だけを赦免しなかったのは、清盛の推挙によって人となりながら清盛の山庄である鹿谷に城郭を構えて敵対しようとしたことへの憤りがやまなかった故であると語る『平家物語』に対して、『嶋物語』は、平相国はとにかくに。昔時の恨を思ひ忘れず。いよ、腹あしくて。終に俊寛を召還さず。(第八套)

と、同じ因をその理由に設定したのである。

つまり、俊寛に対して苛酷な清盛の態度を松の前をめぐる恋争いによって説明するにとどまらず、成親の謀議の原因となった大将人事までもそれに関わらせて意味づける。権力争奪の対立の原因を成親の私怨によるものと縮小した『平家物語』の構想をさらに単純化し、その成親の怨恨すら松の前をめぐる俊寛と清盛の対立に起因したように組み換えるのである。

六

史実に見出された要素をもとに、俊寛・清盛の対立を虚構化の契機としたことはたしかである。しかし、馬琴は『嶋物語』の中で対平氏の闘争を描こうとはしない。清盛は背後にあって人々を動かす役割を果たすのだが、直接物語の表面に現われて行動することは少ない。その最期が語られることもなければ、俊寛との対立の結果も知らされないままである。俊寛に焦点をあてた物語展開に、馬琴の意図は向けられないということである。『嶋物語』は頼朝の蜂起と義経の参陣を将来のこととしたまま物語が閉じられる。物語の機軸をなすはずの、松の前を間にした清盛・俊寛の対立が物語を支配せず、俊寛は主人公の資格を持たないとすれば、『嶋物語』の機軸は外に求められなければならない。

ところで、史実から見出した対立軸を冒頭に据えて始まる模索期の

〈史伝物〉三作は、どれも、その対立の決着を物語化しなかった。

『弓張月』の為朝は、保元の乱で崇徳院を苦しめた清盛の討伐を期して水俣を出帆したはずなのに、薩南海上で難破し琉球に漂着してからは、もっぱら琉球争乱の中に身を投じていくことになった。その間に清盛は死んでしまう。末尾における新院御陵の前での自裁の姿によって、新院に対する忠誠という為朝造型の基本はその一貫性を保障されてはいるものの、清盛との対決を欠くとき、物語はある種の空隙を残すように思われる。それに代えて物語を充填し完結性を付与するのは、対清盛の主題をはるかに凌駕する琉球の神話的対立の解決——無秩序の根源である原初の虬の再現・霧雲国師を討って、琉球国の国家秩序を再建(更新)するための戦いである。清盛討伐が日本編の為朝の主要目的となりながら、それはとうとう実現せず、代りに琉球王権をめぐる根源的な秩序の戦いが遂行されるのである。

また『怪鼠伝』は、美妙水(清水)冠者義高による仇討ちが主たる物語軸を成すように語り出されながら、史実の制限によって頼朝を討ち果たすに至らず、その狩衣を刺して復仇に代え、自ら両眼を突いて盲目となった義高の隠棲によって物語は閉じられる。そしてここでも、歴史に見出した基本的対立構図が解決されないままであるのに対して、義仲父子にとり憑き国を乱そうとする頼豪怨霊の跳梁と鎮静をめぐる象徴的猫鼠対立の構図が設定され、頼豪怨霊を鎮魂することで物語の完結感は満たされることになっていたのである。

両作品とも、冒頭で主人公に与えられた役割は貫徹されないものの、

それは虚構世界への足がかりとなり、そこから虚構の原理に支配された闘争に加わっていくことになる。

では『嶋物語』の場合はどうか。松の前をはさんで生じた清盛と成親・俊寛の対立が物語を始動させる契機となった。成親の処刑、俊寛の流罪、松の前の死も、清盛の意志によって生じたことであった。清盛に渊源する力が人々の運命を左右してきた。たしかに、この物語は清盛を敵対者として展開したとすることができるところが、その物語の主対立、対清盛の葛藤は決着がつかない。それは、清盛が戦闘の中に没するのではなく、病死するという史実の規制によるのだろう。しかし、たとえば病死ではあっても安穩な死とはほど遠い「あつち死に」に虚構の手がかりを見出すこともできたはずである。『平家女護島』のように、千鳥・俊寛の妻東屋の霊が清盛に取りつき病死に追いこむと構想するような例がないのではなかった。にも関わらず、馬琴はそうした虚構を施すことがない。結局、対清盛の契機によって物語を完結させようとはしなかったわけである。

『怪鼠伝』においても義高の敵討ちは挫折するが、敵討ちの物語が語られなかったわけではない。敵討ちを決意した義高が諸国の義仲方残党を糾合しようと旅立つところで終ったならば、『怪鼠伝』も『嶋物語』と同等の構成を持つと見做しうる。が、失敗したとはいえ、敵討ちは実行に移されたのである。〈予譲の故事〉に依拠しつつ、『怪鼠伝』は挫折する二重の敵討ち物語として自立しているとさえ言うてよい。それに対して『嶋物語』は、俊寛対平氏の対立の物語として自

立しないばかりか、別種の伝奇的展開を図るようにも構想されていないのである。清盛との対立によって語りだしながら、その決着によって物語を閉じることをしないとき、『嶋物語』の完結のためには、別の方法が必要とされるはずである。

注

- (1) 『平家物語』流布本の引用は、元和九年刊の片仮名交り附訓十二行整版本を底本とした、高橋貞一校注『平家物語』上(昭47・5、講談社文庫)の本文による。
- (2) 『俊寛僧都嶋物語』の引用は、架蔵の後印本に拠った。
- (3) 拙稿「〈史伝物〉の成立——馬琴読本と時代浄瑠璃——」(『日本文学』第37巻第8号、昭63・8)および「虚実の往還——『椿説弓張月』試論——」(『山形女子短期大学紀要』第16集、昭59・3)参照。
- (4) 拙稿「〈巷談物〉の構造——馬琴読本と世話浄瑠璃——」(『菊田茂男退官記念 日本文芸の潮流』平6・1、おうふう、所収)参照。
- (5) 拙稿「琉球争乱の構図——『椿説弓張月』試論——」上・下(『山形女子短期大学紀要』第15、17集、昭58・3、昭60・3)参照。
- (6) 拙稿「『頼豪阿闍梨怪鼠伝』論序説——稗史的世界の基底——」(『山形女子短期大学紀要』第18集、昭61・3)、『頼豪阿闍梨怪鼠伝』論——稗史的世界の構造——(『読本研究』肇輯、昭62・3)参照。
- (7) 巻之一「俊寛僧都嶋物語引用書目姓氏古跡出證」では本書執筆に利

用した『平家物語』諸本として『源平盛衰記』『長門本平家物語』を挙げ、
「流布本」も加えて比較すると、『源平盛衰記』に拠ったことが判明する。

(8) 俊寛の〈罪惡〉の問題については、別稿で改めて考えたい。

(9) 『源平盛衰記』の引用は、東北大学附属図書館狩野文庫蔵本(寛政八年版)による。

(10) 大高洋司「文化五、六年の馬琴読本」(『読本研究』第五輯上套、平3・9)参照。